



「生活のなかにこんなものがあつたら
楽しいだろうな、と思うものを作ってます」



写真上 蓋にはオルゴールが仕掛けられていて、中央の取っ手を回すと曲を奏でる。「響陶茶櫃 木洩れ陽に息う」(茶櫃: 約23 × 18 × 高さ13cm / 急須: 約14 × 8 × 高さ10cm / 湯冷まし: 約12 × 9 × 高さ7cm / 煎茶碗: 約径6 × 高さ5cm、6客)

写真左 「観華容器 雲の断片に、」(約35 × 23 × 高さ28cm)
※飛行機型陶器は作品の付属品ではありません



滝口和男
Kazuo Takiguchi

“五感を刺激する陶” そこから生まれる 二つの対照的な作品。

photo: YASUKUNI IIDA text: HIDEKO OIWAKE

陶

芸家、滝口和男の世界にある。は、二つの対照的な作品がある。

一つは、土と対話するなかで、自分でも予想できない作品になっていく抽象形態の「無題」シリーズ。「土とじゃれあう」とか「半分は土まかせ」と表現するが、土の塊を手で5ミリほどの厚さに畳1畳分伸ばした土の板と格闘し形を作る。「言葉がすくいあげられるような、言葉が生成される過程みたいなものかもしれない。焼きあがって、そうか、こういうことを考えていたのかと、ようやく言葉

になるみたいだな」と話す。

もう一つは、初めに言葉ありき。言葉から発想して作る具象物の「ミニチュア」シリーズ。陶器のスピーカー、蓋を開けると香合や香炉、とつくりとぐい呑みなどが入っている玉手箱のような作品群である。その細工と絵付けの繊細さや可愛らしさ、その発想の自由さと楽しさは格別である。

滝口は、やきものの里、京都・五条坂の陶器問屋の家に生まれた。ストリートに陶芸家への道に進んだわけではなかったが、最初の出品で京都市長賞を受賞、以降外務大臣賞、日本陶芸展最優秀作品賞(秩父宮賜杯)、五島記念東急文化賞など、輝かしい経歴を持つ。もっともその40年のキャリアを振り返り、ご本人は「陶芸家であるという鎧を着けていた」と自戒を込めて話す。

「自由に作り始めたはずだったのに、いつしか自分で陶芸はこうあるべきという壁を作り、評価やしがらみに縛られていたのかもしれない」

「陶芸家という鎧」を脱ぐこと

ができたのは、ほんの1年ほど前だとか。今回の展覧会は、そんな陶芸家の壁を突き破った滝口の新しい世界だといえる。

テーマは「五感を刺激する陶」。観、薫、味、響という言葉を設定し、そこから二つの対照的な創作を行っているが、「生活のなかにこんなものがあつたら楽しいだろうなと思うものを作ってます」と話すとおりの、そこには共通点がある。陶芸の常識の縛りから解放された自由さ、軽やかさ、予想外の用途も含め、そうか、陶器でこんな楽しさもあるのかと、ワクワクする斬新と驚きに溢れていることである。

たきぐち・かずお 1953年京都・五条坂生まれ。同志社大学中退後、京都芸術大学美術学部へ入学。国内外で個展多数。2013年、京都市文化賞功労賞受賞。

Information

高島屋美術部創設110年記念
滝口和男 陶で知る 観・薫・味・響を
日本橋店6階 3月22日(水)→28日(火)
京都店6階 4月19日(水)→25日(火)
大阪店6階 5月31日(水)→6月6日(火)
ジェイアール名古屋タカシマヤ10階
6月21日(水)→27日(火)
上記各店美術画廊